

西川吉之助： 教育に目覚め、しかし、思い砕けた小樽時代

愛媛大学教育学部 立入 哉

1. 西川吉之助の誕生と青年期

西川吉之助の父、吉武（八十二郎）は、近江国蒲生郡羽田村 久保源治の二男として天保14年9月5日に誕生する。その後、慶応2年6月28日に、西川家七代 善六（吉輔^{※1}）の四女 佐智と結婚、西川家に婿養子として入家し、西川吉武となる。明治7年9月3日、西川家の二男として、吉之助が誕生する。父、吉武が、明治9年9月1日、函館にて35歳で亡くなる。長男 繁二郎は明治3年10月10日に生まれるも、同13日に亡くなっていることから、吉之助はわずか2歳になったばかりの明治9年9月13日、西川家の家督を継ぐことになった¹⁾。吉之助は、早くに父親を亡くしたため、祖父にあたる吉輔に養育されたという。吉之助が、翻訳や荘厳な文章を綴ることができたのも、国学者である吉輔の影響を受けたのではないかと思う。

小学校卒業後、東京の私立商業素修学校に入学。卒業後、北海道に向かう。農場の開墾を行っていたようだが、明治28年北海道庁の許可を得て、私立小樽商業学校を設立、校長に就任する。明治30年には同校は廃校となる²⁾。

明治31年1月17日、吉之助は、西川（本家十代）貞二郎の長女、君と結婚、西川伝右衛門（本家）の相続人となった（西川家十一代となる）（仲人は彦根の儒者 谷鐵臣＝吉輔の友人）。吉之助 24歳、君 20歳（数え年で19歳との記載もある³⁾）の時である。西川貞二郎は、

北海道おしよろ忍路で漁業を行い、また八幡銀行（現在の滋賀銀行）の頭取を務めるなど事業家でもあり、近江八幡市の日牟礼八幡宮に伝わる 薪能「日觸詣」の作者など文芸にも通じていた。

明治32年長女 昌子が誕生する。西川吉之助、濱子の記録は、濱子の姉である昌子によるものが多い。

明治34年、かねてから知り合いだった北海道開拓で知られるエドウィン・ダンが、アメリカ・スタンダード会社の資本を受け、アメリカから採油機材を輸入、直江津郊外に油田を開く。吉之助は、ダンが支配人となったインターナショナル・オイル・カンパニーの会計担当者として、新潟県直江津市に転居する。イ社は、その後、北海道石狩郡高岡で油田を掘り当てるが、明治40年、新潟の事業は、イ社から日本石油（新潟県柏崎市、内藤久寛社長）に売却した^{※2、4)}。

新潟での仕事を失った吉之助は、西川家の家業を養父 貞二郎に任せ、明治40年、単身、アメリカに渡り、サンフランシスコで古屋百貨店の支配人などを務めた。この頃、吉之助は、英語、ロシア語、ドイツ語、フランス語に堪能であったと伝えられている。

大正4年、貞二郎が高齢になったこともあり、帰国する。貞二郎は大正13年に没する。

大正5年、濱子誕生。大正8年、濱子に響との診

※1：西川吉輔は江戸時代末期の近江彦根藩の国学者である。実家は近江八幡の肥料売買を営む商人であったが、吉輔は国学を学んで国学者となり、1848年に私塾である帰正館を創設し、多くの門弟を教育した。吉輔は尊王派であったために井伊直弼から疎まれたといわれる。1863年に将軍・徳川家茂が上洛しようとする、これに反対の意思を示すために等持院にあった足利尊氏・足利義詮・足利義満ら足利将軍3代の木像の首を切り、賀茂川の川原に晒すという事件を引き起こした。このため、江戸幕府から処罰されている。後に日吉神社の大宮司（神官）となった。明治13年（1880年）に死去。
※2：後に、イ社は北海道の油田も日本石油に売却している（日本石油は現在、ENEOS（JX日鉱日石エネルギー）として存続している）。

断が下りる。以後の歴史は様々な書で紹介されているとおりである。

吉之助の歴史の中で、大正4年の帰国以前の記録は余りなく、歴史をたどることに限界がある。その中で、今回、明治28年～明治30年の吉之助の足跡を一部であるが、たどることができたので報告したい。

2. 今回の目的

※1の注記の通り、吉之助の育ての親でもある祖父は、私塾を開いている。吉之助も、弱冠21歳の時に、私立小樽商業学校を設立、校長に就任する。しかし、わずか2年の学校経営の後、同校を廃止してしまう。濱子がろうとわかり、その教育に情熱を燃やした吉之助には、祖父の影響を受けて、若くして学校を設立したという経緯は余り知られていない。今回、歴史的資料から、吉之助が青年期に学校長を務めた小樽時代を明らかにし、小樽商業高校を2年間で閉じた経緯を考えたい。

1) 「小樽新聞」のマイクロフィルム

小樽市立図書館のマイクロフィルムにはところどころに欠号があり、明治28年から4月から明治30年12月の記事の中に吉之助が設立した小樽商業高校に関する記述は1件のみであった。

わずかに「小樽新聞」に、当時の学校の数などが掲載されている記事があった。これによれば、「専門学校に属するもの7校、その他の各種学校に属するもの13校、教員合わせて26人、生徒561人」との記述が見られたのみであった。なお、当時、小樽には私立盲啞学校が1校あり、教員1名、盲生徒7人が学んでいたようである。

この前後、小樽に商業高校を設立しようとする動きがあり、実際、明治25年には依田寛一によって設立された小樽商業高校があり、さらに明治34年7月18日には日下龍夫による日下私塾から発展した私立小樽商業高校が文部省の認可を受ける⁵⁾。後者の小樽商業高校は、現在、北照高等学校として歴史が続いている。この他、大正2年には、北海道庁立小樽商業学校が創立され、その後、一時は北海道小樽緑陵高等学校と改称するものの、現在は北海道小樽商業高等学校と称している。これらいず

れの小樽商業高校とも、吉之助創設の小樽商業高校とは縁がない。

さらに、「小樽新聞」明治29年12月4日の記事では、「相生町に在る商業夜学校」と表記している。吉之助の小樽商業高校に関して最も古い記述がある「小樽港史」では「小樽商業高校」としており、また、小樽市史で紹介されている公文書でも「小樽商業高校」となっていることから、校名は「小樽商業高校」であったと思われる。しかし、開講形態として夜間制であったのであろう、また、「小樽商業高校」を冠する学校が多々存在するために、吉之助が開校した「小樽商業高校」を、「小樽商業夜学校」と便宜的に命名したのではないかと思われる。

2) 小樽港史、小樽市史

①開校の時期

「小樽港史」に、「明治28年6月には私立小樽商業高校、及び佛教女学校の新設あり」との記述を発見した⁶⁾。「小樽市史」では「小樽港史」の記述を紹介し、当時の土地の拝借願が紹介されており、貴重な資料である。以下引用する。

共有地建物無代拝借願

小樽郡相生町旧病院跡所在

1. 共有建物葺葦平屋 壹棟

此惣坪数式拾四坪二五号

右之共有建物今般私立小樽商業高校教場用トシテ無代拝借仕度尤モ御入用ノ節ハ何時ニテモ明渡シ聊カ損害相加申間敷此段奉願候也

明治廿九年十一月十一日

私立小樽商業高校々主 西川吉之助

小樽外六郡長 添田弼殿

これによると、明治29年11月11日にかつて病院があった場所（公立小樽病院）の土地にあった建物を校舎として、無償で借りたことがわかる。無償で借りているという実態から、吉之助の小樽商業高校が、学校として認知されていたことが容易に想像できる。しかし「小樽港史」の記載「明治28年6月には私立小樽商業高校の新設あり」が正しいとするならば、校舎を借り受けるまでの1年間はどのように

いたのか。あるいは「小樽港史」の記述が間違っているのかとの疑問が生じる。吉之助は「学校設立について北海道から認可を受け・・・」との記述がある²⁾。今後、北海道の「道報」または「北海道新聞」などを調査し、認可の有無、設立の時期を明らかにしたい。

②閉校の時期

「小樽港史」の年表欄に、「明治30年 小樽商業高校が閉校した」との記述がある。しかし、明治30年のマイクロフィルムが現存する小樽新聞には閉校に関する記事が皆無であった。上記のように校舎を無償で貸与を受けていた学校の閉校、また、後述するが、小樽で商業高校の必要性が訴えられていた時期だけに、この事実には何かしらの不一致があるのではないかと。

閉校については、再び、「小樽市史」に借りた校舎の返却願が掲載されているので、以下に引用する。

拝借公有建物返却願

私儀管理致候私立小樽商業高校ニ於テ授業用ノ為メ
従来小樽郡相生町廿一番地旧公立病院跡所在公有建物
一棟拝借居候処今般同校廃校致候ニ付右拝借建物御
返却仕度此段奉願候

明治三十年十一月六日

後志国小樽郡堺町廿一番地

私立小樽商業高校々主 西川吉之助

北海道庁小樽支庁長代理 北海道庁属 金子淳殿

これによれば、明治30年11月6日には廃校し、建物を返却したことがわかる。しかし、なぜ、小樽新聞に廃校に関する記事が見つからないのか。もし、廃校に関する記事があるのであれば、そこに廃校となった理由が1行でも紹介されているのではないかと感じてしまうのである。

この文書から、小樽商業高校の住所は、旧公立病院があった〔相生町21番地〕（現在は小樽市相生町5-16）であり、吉之助の旧宅は〔堺町22番地〕（現在は小樽市堺町3-24）であったことがわかった。

3. 小樽教育界の動きと小樽商業高校の位置

1) 小樽教育会独自の商業学校設立の動き

当時の小樽市は札幌にある本庁から鉄道で結ばれ、特別輸出港に指定されるなど、大規模な商業都市として発展していた。小樽市には明治10年に景德小学校が設立されるものの、中等教育を行う教育機関がなかった。このため、簿記など学びたいと欲する者のために多くの私塾が誕生していた。

このような機運の中で商業高校の開設を望む声が大きくなってきた。小樽新聞：明治29年12月4日付け雑報欄では、その当時の進捗状況が紹介されている。

小樽に商業簡易学校の設立を見るべきことについては、本紙上かねてより報導せしが、いよいよ明日をもって万般の協議を整うる筈なりと。今発起人について聞く所によれば、現在相生町に在る商業夜学校を土台とし中学校の程度を以て教授し、明日協議のまとも次第に設立の請願と共に国庫の補助を請うとの事なるが、補助額はかねて記載の如く800円の見込と云う。

その翌年、明治30年3月2日の小樽新聞は、2月28日に小樽商業会議所で開かれた小樽教育会総集会の様子を報じている（一部現代かな遣いに修正）。

当港（小樽港）に一の私立商業高校を設立するの必要なるを以て其方法調査並に実行運動・・・調査の結果、私立学校としては設立する能はざるを発見せり、即ち私立として出願するには之を公共組合よりせざるべからず、然れども、当港には之に該当すべき公共組合なきを以て・・・委員等は公立の学校となし、且つ学科程度も完全なる中学程度とするに決したり其経費は一ケ年4326円にして内726円は生徒授業料より得べく1200円を有志の寄付より、1200円を町費より、1200円を国庫の補助に受くべき見込なり。如此くしたらんには設立せしむに難からずと思ふ。・・・前途経営すべき他の多くの事業の爲め教育の一方にのみ意を注ぐ事、能はず、止む得ず今後五年の間に着々其実行を見んとするのは計画なり。・・・目下金融必迫の際なれば例令予約もせよ承諾する以上は五ケ年支出の義務ある事なれば募集に困難ならん。（寄付の応募期限が）七月迄とは余り永きのみならず其内に国庫教育補助費欠乏せん事を恐る。・・・議場

又々沸騰し、福原資孝氏無期限説を提出し、予め期限を定めずして成るべく早く結了する様委員の尽力を乞うと述べたに大多数を以て之を決す。

この新聞記事が掲載された明治30年3月2日は、吉之助による小樽商業高校が存在していたはずである。なぜ小樽教育会は既に存在している吉之助による小樽商業高校を拡充させるという数ヶ月前の案を踏襲せず、独自のファンドで、それも十分な額が集まらないことを見越し、振込期限を無期限としてまでも独自の商業高校を設立しようと考えたのか。同日の小樽教育会は、以下の議決も出している。

小樽新聞社と特約して紙面の一部を借り本会（小樽教育会）の機関となす件に付建議。

この一文から、小樽新聞は小樽教育会と強いつながりがあったことがわかる。あくまでも想像であるが、小樽から少し離れた忍路にて強大な漁業事業を行う西川家は忍路港という独自の港を持ち、小樽商業会議所とは距離を置いていた（少なくとも、小樽港史における西川家あるいはナカイチの存在は非常に薄い）と思われる。

そうした状況の中で、吉之助は自分が商業高校を運営しているにも関わらず、小樽商業会議所が中心となって、別個の商業高校設立の機運が高まっているという報道がなされ、もはや自ら商業高校を運営する価値が見えなくなり、早期の廃校につながったと考えるのは、空想の広げすぎであろうか。

2) 中等教育か、実業教育か

この明治30年の議論の後、小樽教育会は商業高校設立を断念する方向に動く。この動きについては、「北照九十年史」が詳しい⁵⁾。

ここに解決されねばならない大きな問題が一つ存在していた。それは、設立されるべきは、商業学校か中学

校か、小樽にもっとも必要なのは、実業教育か普通教育か、ということである。この後数年間、官民共に意見は二つに別れ、論争を続けてきた。（中略）しかし、小樽教育会は臨時総会を開き、次のような理由で商業学校設立に反対を決議したのである。「中等教育の先後緩急を過る」「特殊教育と普通教育とは緩急あり」と。（中略）

ともあれ、結局、道議会は道庁の提案を否決し、小樽中学校設立案の建議を満場一致で可決、商業高校設立賛成派は敗退したのである。

明治30年と言えば、吉之助にとっては、明治31年1月17日の君との結婚、西川伝右衛門（本家）の相続人となる時期を控えた年である、吉之助は、小樽での学校経営より、忍路での本家の仕事をしなくてはならなかったのであろう。上記のようないくつかの要因を受け、僅かな期間の校長経験となったのではないかと思った。

4. まとめ

吉之助が創立した小樽商業高校の設立の時期、また閉校の理由について、いくつかの史料を見つけることができたが、確定的な史料は見つけ得ていない。今後、特に、吉之助が小樽商業高校を興そうとした理由、また早期に廃校した理由を明らかにすべく、史料の収集にあたりたい。

吉之助は、濱子がろうであったから、教育に一生を捧げる道を選んだのかも知れないが、私は、吉之助は祖父 吉輔から受け継いだ教師魂のようなものを持っており、それが濱子がろうであったことがきっかけとなり、花咲いたと考えている。吉之助を障害がある子の特異的な父親像と分析する向きもあるが、むしろ、そもそも教師としての生き方を身に内包しつつ家業を続けるも、濱子のろうが、それを開花させたと考えれば、吉之助が濱子に与え尽した教育の熱さが理解できるような気がするのである。

1) 小林正彰、西川吉輔、西川吉輔顕彰会、336-367,1971

2) 高山弘房、口語法教育の父 西川吉之助伝、湘南出版社、18-19,1982

3) 2) と同掲書、170,1982

4) 高倉新一郎・原田和幸、エドウィン・ダン著 我が半世紀の回想、北方文化研究報告 12号別冊,235-238,1957

5) 北照高等学校、北照九十年史、北照高等学校,6-14,1991

6) 高畑宜一、小樽港史、54、1899